令和4年度卒業式（3月24日） 校長告辞

本日小山高専を卒業・修了される皆さん、誠におめでとうございます。皆さんはこれまで、共に過ごした学友や、先輩に後輩、また指導を受けた教員など、本校で多くの人々と出会い、切磋琢磨をつづけ、めでたく今日という日を迎えられました。その努力に敬意を表します。また、これまで皆さんを地道に支えてこられたご家族の皆様にはお喜びを申し上げるとともに、長年のご支援に感謝いたします。

卒業生・修了生の皆さんは今どのような気持ちでおられるでしょうか。きっとこれからの人生に大きな希望を持っていることと思います。また、パンデミックが続く中で新しい生活を始めることもあり、少なからず不安を抱いている人もいるでしょう。しかし本校に入学された時の自分の気持ちを思い出してみてください。やはり希望と不安が入り混じっていたのではないでしょうか。楽しい思い出や苦労を良い経験として積み重ね、大きく成長したことを実感していませんか。昨年ある監督が「青春はすごく密」と語って少し話題になりましたが、本校で得た密な経験は皆さんを大きく成長させてくれたはずです。自信を持ってこれからの人生を歩んで行ってください。

本校は優れた技術者という人材を育成し、社会に送り出すことを目指しています。こんにち、この人材の材には材料の材という文字が充てられることが一般的のようです。また一部では財産の財も使われています。しかし、江戸時代までは才能の才が使われていたそうです。英才教育などの言葉にも使われる文字ですが、孟子は天下の英才を得て教育を行うことは君子の楽しみの一つであると言っています。日本においては藩校や私塾が国家の用に供する人才を教育する学校という文脈で用いられました。その後、人を使う側から見て優れた人のこととして材料の材や、財産の財を当てた漢字が使われるようになって行きました。明治維新後、それまでの封建社会にはなかったさまざまな新しい職業が生みだされましたが、福澤諭吉は異なる能力を持つ人々が力をあわせて事業にあたることの大切さを説きました。自己利益の追求が目的ではなく、個々の力を集めて公共性を追求することが目的であり、その目的が遂行された結果として利益が得られるという理念でした。このころから、社会全体のために公益を追求すべく人材や資本を集めるという流れに変わって行き、人才の字も変わっていったのかもしれません。

第二次世界大戦後、日本は近代化により目覚ましい発展を遂げ、その成果による幸せな暮らしを期待しました。しかし技術の発展だけで人類社会は豊かになるのかと疑問を持つ人が増えています。ここ数年世界で起こっている事態は拡大する格差の問題や自国第一主義の台頭など、複雑化しています。局地的に発生したこともその影響は世界に及び、グローバル化した現代にあっては世界的なレベルでの協調がなければ社会は安定しにくくなりました。社会の反応が顕在化するまでにはある程度時間がかかり、その遅れが全体を不安定化する一因となることは制御理論でも判明しています。全体を視野に入れずに行ったことの結果がいつか自分に跳ね返り、結局は社会全体にとって大きな不利益になりえることを認識すべきでしょう。グローバルな視点を持った有能な人材の教育が今求められています。

社会に寄与しうる技術者の育成は本校にとっての使命ではありますが、それは有能な若者達を指導したことの当然の結果です。明日から社会人となられる皆さんは、新たな場でいよいよ社会に貢献する出番を迎えられます。本校で培った能力を存分に発揮して下さい。また進学される皆さんはもうしばらく才能を磨く時間を持たれますが、是非その時間を大切に羽ばたく準備にいそしんでください。いずれにせよ社会で皆さんが今後活躍されることで、本校の使命が結果に結びついて社会に示されることになります。皆さんのこれからの活躍に大いなる期待をしています。

本校の教育理念は「技術者である前に人間であれ」でした。皆さんは若き技術者の卵として厳しい研鑽を積みつつ、どのような人間でありたいと考えてこられたでしょうか。今後どのように成長されるのかが楽しみです。二年後に創立六十周年を迎える本校ですが、我々はその在り方について常に考えており、皆さんのように才能を開花させた人才を世に送り出すことで、本校が社会に役立ちつづける教育機関であるよう、これからも努力を続けて行きます。皆さんも小山高専出身という誇りを胸に、グローバルシチズンとして活躍されることを心から祈念して、私の祝辞といたします。では皆さん、いってらっしゃい。

令和5年3月24日

国立高等専門学校機構
小山工業高等専門学校
校長　堀　憲之